前号を読んで

アカデメイアの末裔

久保　徹
人文社会科学研究科講師

大学時代、一人の友人がいた。無器用にぎこちなく世界と向き合っていた。何事にも打算なく真っ正直に向かってゆく奴だった。まだ学生運動の燻りが残るなか、学業と活動のはざまで為すすべもなくもまれていった。文学部の学生の信条は破天荒だと信じていた私は、痛々しいほどに潔癖なその人柄に共感していた。よくそいつの下宿で酒を飲んだ。何を話しても意気投合し、居心地がよかった。ハイデガーの原書を買い込んでは、つい買っちまってなどと照れていた。仕送りの大半は酒代と本代に消えていたはずである。結局、そいつは仏文に進んだが、卒論は出さずじまいだった。その後、私は大学院に進み、彼は就職もせず郷里に引き上げて、やがて音沙汰がなくなった。

紀元前387年、プラトンはアテナイの郊外に学園を開く。哲学と政治、二つの道の間で思い悩んだすえの決断だった。人々を真に幸福な生き方に導くことが政治の仕事である以上、哲学こそ本当の意味での政治である――と、プラトンはある対話篇でソクラテスに語らせている。アカデメイアでの研究・教育は、哲学と幾何学などの数学的諸学問を中心とし、現実の政治や社会に目を奪われることなく、もっぱら自由な精神の営みのなかで第一級の知性と見識をそなえた精神を育むことを目的としたが、しかし同時にプラトンの学園からは多くのすぐれた政治家が輩出した。哲学の研究・教育を現実の政治や社会に反映させることをも、プラトンは目指していたのである。

すべてが通俗化してゆく現代の風潮にあって、「社会の要請に応える」とは、いったいどのようなことを意味するのか。時代とともに学問・研究の形は変わるだろう。だが、学問・研究や教育が、政治や社会に取り込まれてはなるまい。

無能な政治家が教育を弄（いじく）る、教育が卑しくなる――数年前、一人の教官が大学を去るにあたってそんな言葉を残された。演習でプラトンのテクストを読みながら、かの無器用にぎこちなく世界と向き合っていた友人の姿を想う。気骨のある学生がいる限り、自由な精神の営みとしての研究・教育の場を維持し発展させることが私の仕事だと思っている。

（くぼ　とおる／ギリシア哲学）